

研究主題

持続可能な社会を担う児童の課題解決力の育成 ～地域の人・自然・社会とのつながりを通して～



ESDを通して育てたい児童の姿 「人・自然・社会との関わりの中で自ら課題を見付け、解決できる子」

具体的な目指す児童の姿	ESDで身に付ける能力・態度
自ら課題を見付け、解決に向けて見通しをもつ。	・課題を見いだす力 ・未来像を予測して計画を立てる力
人・自然・社会との関わりの中で、自らの考えを構築する。	・批判的に考える力 ・多面的、総合的に考える力 ・コミュニケーションを行う力 ・他者と協力する態度
人・自然・社会と自己との関わりを考え行動する。	・つながりを尊重する態度 ・すすんで参加する態度

教育長あいさつ

日野市教育委員会教育長 米田 裕治

本校では、令和元・2年度東京都教育委員会持続可能な社会づくりに向けた教育推進校として「持続可能な社会を担う児童の課題解決力の育成」を目指し、授業改善、カリキュラム・マネジメント、校内環境の整備を視点として研究してきました。

まず、授業を子供たちの主体的な学びとするため、生活科や総合的な学習の時間を中心に、「価値ある共通体験」と「子供の問いを生む学習過程」の充実に努められました。そして、地域の方々、自然、社会とのつながりを大切にしたい実践を進める中で、教科等横断的な視点からESDカレンダーの改善、活用、学習内容の工夫といったカリキュラム・マネジメントも推進されております。今年度は、児童が地域の川で遊び続けられるように、ゴミ拾いなどの自然を守る活動を進んで実践する姿や、市内の環境について調べた児童が、環境改善に向けた活動を発表するなどの活動が行われました。これらの学びは、「SDGs」に代表される地球規模の課題を解決する意欲と実践する力をもった児童を育むと確信しています。本校の実践は「疑問や驚きから生まれる問いを大切に、自分たちなりの方法で自分たちなりの答えにたどり着く過程を大切に」という点で、第3次日野市学校教育基本構想に基づいた実践でもあります。

また、本市は令和元年7月1日に東京都内で初の「SDGs未来都市」に選定されました。本校の「SDGs」を踏まえた校内環境の整備や教育実践が、持続可能な社会づくりに資することを期待しています。

結びにこれまで本校の研究に御指導いただきました、講師の先生方、研究を推進された松永式子校長先生をはじめ教職員の皆様、そして日頃から本校の教育活動に御協力いただいております保護者、地域の皆様に心より感謝申し上げます。

校長あいさつ

日野市立日野第八小学校 校長 松永 式子

本校は、令和元・2年度の2年間 東京都「持続可能な社会づくりに向けた推進校」として、「持続可能な社会を担う児童の課題解決力の育成」に取り組んできました。

今年度は、昨年度の「地域を生かした学習」の中で、ESDの資質・能力を育むことから一歩進み、児童に学びの必然性をもたせることはそのままに、児童が人・自然・社会との関わりの中で自ら課題を解決する意欲と力の育成に重点をおきました。地域と児童自身との関わりを重ねるごとに児童の関心が高まり、今までは当たり前だと思っていたことに改めて興味のスポットライトを当てたり、「この問題解決のために、自分も何かしたい」と思ったりする姿が見られました。子供たちが知恵を試し、友達や先生と話し合い、様々な手段を講じながら解決に向けて取り組む姿が見られたことはとても喜ばしいことでした。ただ、その児童の行動や意欲・思考・意識の変容について、授業者が十分な視点をもって適切に評価をすることが大きな課題でした。指導と評価の一体化の必要性は、学習指導要領にも明示されています。学びを通じた児童の姿を客観的に評価することで、教師は児童への学習効果・教師自身の指導の成果を再認識することができます。今年度の研究では、評価規準を明確にし、毎時間の授業を大切にすることを特に重視しました。教師自身も協働しながら、教材研究し、授業を作り上げていくことができたことも大きな成果だと感じています。

最後になりますが、私たちの研究を励ましながら指導し支えてくださった、東京都多摩教育事務所指導課嶺井勇哉先生、辻泰成先生、東京都教育委員会、日野市教育委員会の皆様に深く感謝申し上げます。

令和3年2月19日(金)

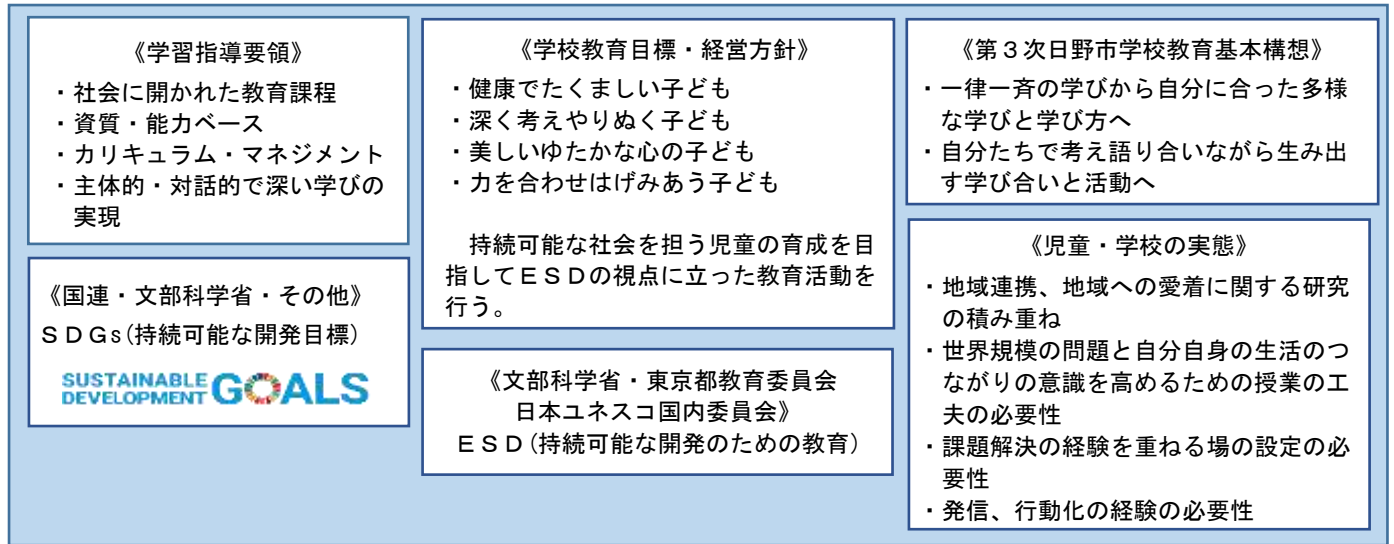
日野市立日野第八小学校

〒191-0032 東京都日野市三沢 200 電話 042-591-2411 ファクシミリ 042-591-2412

学校ホームページアドレス <http://www.e-hino8.hino-ky.ed.jp/>



研究構想図



【目指す児童像】

人・自然・社会とのつながりの中で自ら課題を見付け、解決できる子

低学年	中学年	高学年	専 科	たちばな・ステップ
人・自然・社会とのつながりの中で町のすてきなところを見付け、楽しむことができる子	人・自然・社会とのつながりの中で課題を見付け、自分なりに解決しようとする子	人・自然・社会とのつながりの中で自ら課題を見付け、解決できる子	課題解決型学習での学びをもとに専科の特性に合わせて自ら表現できる子	人・自然・社会とつながる体験や活動を通して、互いのよさに気づき、楽しむことができる子

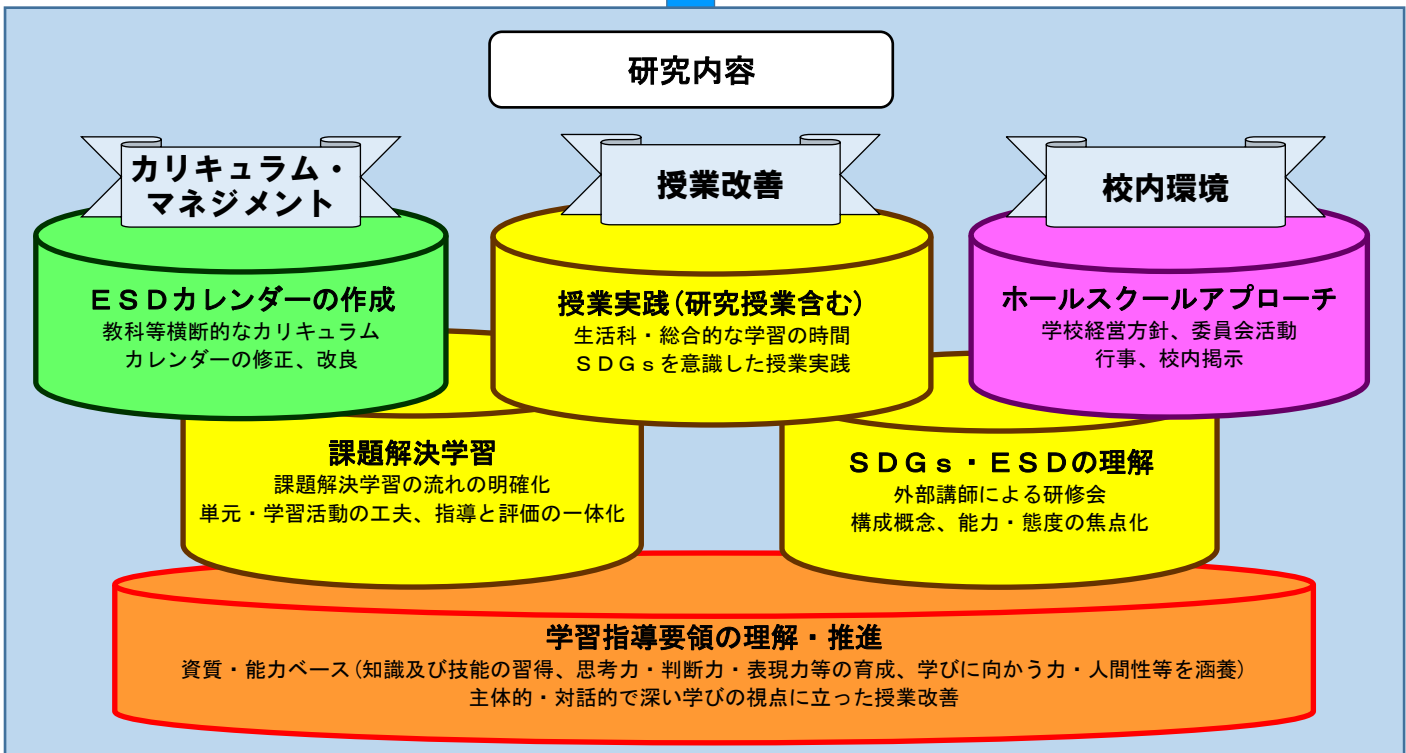
研究主題

持続可能な社会を担う児童の課題解決力の育成
～地域の人・自然・社会とのつながりを通して～

研究仮説

S D G sの視点を持ち、E S Dの構成概念を活用させながら地域をフィールドにした課題解決学習を行うことで、持続可能な社会を担うための能力・態度を身に付けることができるだろう。

研究内容





カリキュラム・マネジメント 【ESDカレンダーの作成】

★ 教科等横断的な指導で子供の学びを深める ★

6年間の学習テーマ

- 世界
- 6年 「よりよい未来を目指して」
(平和・教育・国際理解)
 - 5年 「わたしたちの環境を守ろう」
(環境)
 - 4年 「わたしたちと水」
(環境・生活)
 - 3年 「わたしたちの日野」
(福祉)
- 身近
- 2年 「見つけよう自分のいいところ」
(身近な環境・農業)
 - 1年 「つながろう！わたしたちの町」
(身近な環境・ふるさと)
 - 1年 「レッツ・ゴー・あさかわ」
(身近な自然・遊び)
- ◆学年の発達の段階に合わせ、世界的視野で取り組むカリキュラムになっている。



ESDカレンダー



◆他教科等や学校行事等と関連させながら、効果的に指導できるようにカリキュラムを工夫する。

- ①学校行事や各教科等の系統性を鑑みて各教科等の単元配列を組む。
- ②総合的な学習の時間の単元配列を考える。各教科について配列を変えられる単元について、学習内容に関連があるものの学習時期を揃える。
- ③関連のある学習材のつながりだけでなく、学習スキルについても関連するものはできるだけ揃える。
- ④総合的な学習の時間の学習内容についても、各教科等の内容から修正を行う。
- ⑤実施後、年度末に再度、修正を行い、次年度の計画を立てる。



校内環境 【ホールスクールアプローチ】

★ 学校全体でESDやSDGsの概念を浸透させるための活動を推進させる ★

- 朝会や集会での講話や委員会活動、また学校行事の中でSDGsやESDの概念を浸透させるための活動を位置付け、計画的に行った。⇒単なるSDGsの17のタイルの学習ではなく、あくまでもESDを推進していく。（児童の課題解決力の育成）ツールとしてSDGsを扱った。
- 教室や廊下などの環境を整備して、掲示物による啓発を行った。



全校朝会での講話



パラトライアスロン体験会



代表委員会 「命の本」の読み聞かせ



授業改善

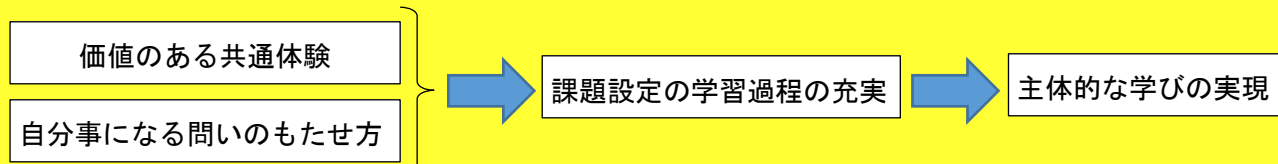
★ 総合的な学習の時間と生活科を中心とした授業改善を目指す ★

(1) 課題解決学習の流れの明確化と実践

生活科や総合的な学習の時間における課題解決学習（生活科では課題解決につながる学習過程として設定）の流れを全校で共通理解し、それぞれの学習過程を確実に実践・充実させることで単元全体の学習が深まると考えた。



(2) 「課題設定」の学習過程の充実



(3) 地域人材・外部人材を活用した授業づくり

児童が自分事として考え、意欲的に自己の課題を解決できるように地域の人材や自然を積極的に活用した。



第4学年「日野市役所緑と清流課出前授業」

「自分たちの住む地域にはこんなすてきなところがあったんだ。」
「自分たちの住む地域のよさを守っていききたいなあ。」
「自分たちの住む地域の問題は自分たちで解決しないとなあ。」

(4) 「情報の整理・分析」の学習過程の充実

思考ツールの活用と対話的な活動の工夫によって、より充実した対話的な学びが実現し、学習が深まると考えた。



第2学年「Tチャートの活用」



たちばな学級「カードを使って役割を決めている」様子

(5) 地域とのつながりの中での行動・検証を意識した単元計画

E S Dの視点から、児童の課題解決力を育成する上で「課題を解決するために実際に行動してみる」ことが大切だと考え、単元の最後に位置付けた。そして高学年では、自分たちの行動を「検証」し、よりよい行動へと修正することを学習のゴールとして設定した。



第3学年「おもてなし交流会」の様子

(6) 単元における評価の充実（課題解決力の評価規準の策定と評価方法の検討）

- ・ 児童の課題解決力を育成するために、総合的な学習の時間や生活科の単元の中でそれぞれの学習過程において、教師が児童にどんな力を身に付けさせ、児童がどのような姿になればよいか明確に意識することが大切だと考えた。（指導と評価の一体化）
- ・ 総合的な学習の時間や生活科の単元の中で、E S D の構成概念と課題解決のための資質能力を明確に位置付け、意識して指導していくことが必要だと考えた。



☆ 評価計画の充実（詳細な評価規準の策定、及び想定される児童の姿の設定と支援の検証）



実践編



第1学年 単元名「レッツ・ゴー・あさかわ」

生活科を中核として他教科等との合科・関連を意識した単元構成を考えた。遊びながら見付けたことや四季の移り変わりに関する気付きを国語科で表現したり、音楽科の季節の歌と関連付けたり、図画工作科で遊んでいる様子を絵に描いたりした。また、遊びの質を高めるための環境づくりを工夫するとともに、質的に高い気付きにつながるようなカードの工夫をした。



【少人数から多人数での遊びへの変容】

最初は少人数で遊んでいたが、河原にある丸太を活用し、石で固定してぐらぐらしないように工夫しながら大人数での遊びに発展させていった。また、十数人で役割分担をしながら長い石橋を作るなどの、ダイナミックな遊びが見られるようになった。



【カードの工夫による変容】

遊びを通して気付いたことがどのような価値をもっているかを常に意識させるために、カードに気付きの視点を例示した。（例：自然の様子の変化、魚や虫などの生き物のこと、自然の不思議さや面白さ、遊びの創造やルール、工夫、友達との協力、自分や友達のよさ）

最初は「〇〇遊びをして楽しかった」という記述が多かったが、遊びの創造や工夫、友達と協力したことによる達成感、自然の面白さや変化の様子などの記述が多くなった。

【行動化】

浅川の河原が魅力的な遊び場であり続けるために、自分たちにできることは何かを考えた結果、遊んだ後に河原のごみ拾いをしたり、河原の自然の大切さを呼びかけるポスターを作ったりすることになり、行動に移した。



第2学年 単元名「つながろう！町のすてきたんけんたい」

単元を構成する際に、国語科で表現したり、発表したりする学習を関連付けた。情報収集に必要な事柄を集めたり確かめたりする活動や、集めた情報を基に組み立てを考えて書く活動を重視するようにした。自分たちの住む町のすてきなところを分かりやすく紹介できることを意識した学習を設定した。



【課題設定の工夫による変容】

地域に住む方の話を聞く中で、知らなかった場所のことは「行ってみたい。」「話を聞いてみたい。」、知っている場所でも「気付かなかったことがある。」「もっと知りたい。」という思いを強くもった。さらに「もっと町のすてきなところを見付けたい。」という気持ちをもつことができた。



【話し合いの工夫による変容】

話し合い活動の中で思考ツール（Tチャート）を活用したことで、児童が知りたいことを整理しやすくなり、インタビュー内容を3観点（店や場所のこと・人の思い・新型コロナウイルス感染症に関係すること）でバランスよく決めることができた。



【行動化】

インタビュー先で聞いた「この町のすてきなところ」と2年生の児童自身が感じている「この町のすてきなところ」を内容に取り入れ、1年生、保護者、地域の人に向けて「町のすてき」を発表した。発表の中で、質問に答えたり、逆に質問したりしてみんなの思いを共有しながら活動できた。

たちばな学級 単元名「いろいろな国について知ろう」

「見つけよう 自分のいいところ」を共通テーマとし、せせらぎ農園やレインボーハウスなどの活動から得られた気づきや発見を自分の成長として振り返り、身近な生活や環境の中で自分の力を生かし行動化につなげる実践的な学習を設定した。



【情報収集の工夫による変容】

身近な存在である学級の教師から紹介を聞くことでとても関心が高まり、PR動画作成の意欲や児童の発想のひらめきにもつながった。また、絵や写真を使う手法や、実物や模型での紹介、話し言葉の工夫などを例示として示すことで児童がPR動画を作成するに当たってのイメージをもつことができ、〇〇が得意だからそれを生かしたいといった声が児童から挙がった。



【思考ツールの工夫による変容】

おとくいカードの活用により、話し合いの際児童が意見を表現しやすく、形に残せるため分かりやすかった。話し合うことで考えが変わっても簡単に操作し直せる点においても効果的だった。カードがあることで「これやってみたら？」と児童同士でアドバイスし合う姿も見られた。



【行動化】(12月実践予定)

話し合った内容を整理してまとめていくためにホワイトボードを活用することで、児童にとって視覚的に情報を読み取りやすくなり、とても分かりやすかった。また、各グループに教師が入り、話し合い活動をファシリテートすることで、児童主体に話し合うための支援を行うことができた。教師の声掛けによって児童の言動にも変化が見られるようになった。



第3学年 単元名「八小のまわりの生き物を調べよう」

単元を構成するにあたって、1学期に実践する社会科、理科の学習と関連付けて考えた。社会科における学校のまわりの地形的特徴など地理的意識の芽生え、理科における昆虫などの生き物の生態や生息に関する興味関心を生かして、地図にまとめる学習活動や、地域の未来を考える学習を設定した。



【単元計画の工夫による変容】

大きな地域マップに生き物・自然・環境・人の働きの順にまとめることで、全てがつながっていることに気づき、自分のできる活動への意欲を高めることができた。



【思考ツールの工夫による変容】

行動化への計画案を実行する際に、持続的に行動可能な案なのかを思考ツールを用いて話し合うことで、計画案の価値に気付くとともに、改善する視点をもちやすくなった。



【行動化】

改善した計画案を各自で実行し、報告会を行った。報告会によって、次の活動につながる発見や自主的に活動している地域の方の存在への気づきがあり、自然と共存する努力を意識できるようになった。

第4学年 単元名「用水について考えよう」

主に社会科の学習と関連付けて考えた。水道水をつくるしくみや玉川上水の学習を通し、水への関心を高めた。教科で得た知識を総合的な学習の時間に生かしたり、用水の学習を他教科等に応用したりすることを意識して単元を構成した。



【まとめの工夫による変容】

児童が調査観察した用水の様子や位置を地域の地図にまとめることで、用水が張り巡らされていることを実感した。観察した用水を紹介し合うことにより、地域を流れる様々な用水に関心をもつことができた。



【思考ツールの工夫による変容】

思考ツール(イソギンチャート・クラゲチャート)を使い、用水が今抱えている問題や、用水に対して自分たちができることを整理することで、用水への思いをより強めることができた。



【行動化】

日野市役所緑と清流課の方を招き、自分たちが立てた行動計画についての疑問や心配事などを伺った。話を通して、自分の行動計画が明確になり、実現に向けて自信をもつことができた。



第5学年 単元名「わたしたちの環境を守ろう」

単元を構成するにあたって環境問題を調べるために社会科と理科の学習に関連付けて考えた。2学期は、1学期の学習を通してまとめた環境問題を基にゲストティーチャーを招き、日野市や企業で取り組んでいる環境問題対策について触れ、ポスターにまとめ実際に行動する学習を設定した。



【報告会を行う工夫による変容】

友達が調べた環境問題の現状と原因について報告会を行い整理した。ウェビングマップを使いながら環境問題について全体でまとめることで、それぞれの環境問題にはつながりがあることに気づき、様々な環境問題に関心をもつことができた。



【まとめの工夫による変容】

ポスターに書く内容を「原因・問題点・感想」と絞ることで、調べる内容を明確にすることができた。問題点を調べて感想を書くことで、より解決しなければいけないという意識をもつことができた。



【行動化】

企業などや日野市役所環境保全課の方から話を聞き、自分たちにできる環境を守る行動を実践したい意欲を育てることができた。

個人で行動計画を立てて、学校や家庭で実践した。

以前よりも「環境を守る」という視点で物事を考えることができるようになった。

第6学年 単元名「よりよい未来を目指して」

国語科の「話すこと」や「書くこと」に関する学習を関連させながら展開し、国語科で身に付けた力を生かすことができるように実施時期を考えた。また、特別な教科 道徳における「国際理解・国際親善」、「思いやり」の学習内容と結び付けながら指導することで、世界の問題に対する興味・関心が高まるとともに、学習内容の理解も深まった。



【課題設定の工夫による変容】

「グアテマラの子供の生活」のワークショップで自分と同じ年齢の子供の生活を考えることで、グアテマラの問題を自分に引き寄せて考え、何かできることをしたいという、課題設定につながる思いが生まれた。



【情報収集の工夫による変容】

ユニセフと国際NGOワールド・ビジョンの方から世界の問題、取組や援助についての話を聞き、自分たちの行動のヒントとすることができた。



【行動化】

地域とのつながりの中で「行動化」を意識した活動の工夫をした。自分たちが実行できることを、周りの人々を巻き込んで一緒に行っていくというイメージで計画を立てた。また、自分たちの行動がどれだけ価値があるものか考え、持続可能かどうかという視点で計画し実践した。

専科(外国語) 単元名「I like my town.」

英語で紹介するテーマを生活科や総合的な学習の時間で学習してきた地域の自然や施設、日野市全体の環境とし、6年間でESDと関連させて学習してきた内容と外国語を結び付けた。また、外国語をコミュニケーションツールの一つと捉えることで、国際理解の学習へとつなげていけるよう課題を設定した。



【ALT活用による変容】

ALTと積極的に会話をする機会をもたせることで、英語を使っのコミュニケーションに慣れ親しむことができた。



【思考ツール活用による変容】

くま手チャートを活用しながら意見を出し合うことで、課題を解決するための考えをたくさん見つけることができた。



【通信機器を活用した発信】

地域の情報を外国人へ英語で発信することは、まとめ・表現の活動の際に効果的であることが実感できた。発信の対象も国際的に大きく広がることを体験することができた。





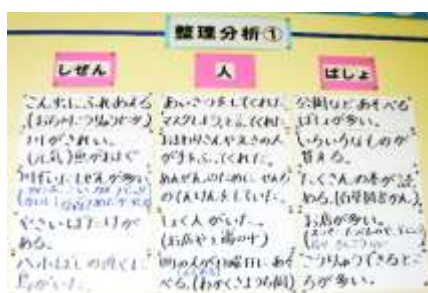
【SDG sの視点をもたせた課題解決学習を充実させるための手立て】

- 1 ESD カレンダーの作成と活用による実践的なカリキュラム・マネジメントの推進。
- 2 学年テーマの設定による、大きな目標を見据えた各教科の学習の連携。
- 3 様々な機会にSDG sに親しむホールスクールアプローチによる、児童主体の活動が活性化。
- 4 課題解決の流れを明確化した総合的な学習の時間、生活科を中心とした授業改善。



【持続可能な社会を担うための能力・態度の習得】

- 課題設定や解決のための学習計画を立てる力が身に付き、目的意識をもって学習に取り組めた。
- 思考ツールを活用して、調べたことをまとめ、整理・分析をする経験を通し、ものごとを多面的に考えたり、批判的に考えたりする力が身に付いた。
- 学習過程においてコミュニケーションの力を高め、他者との対話を通して協働する態度が身に付いた。
- 課題設定から行動化までの道筋が身に付き、自分事として解決しようとする意欲が高まった。
- 予測のできない将来の社会において、新たな課題に主体的に対応する基礎を養うことができた。



- ▲ESDカレンダー…児童の実態や学習の内容に応じて、柔軟にとらえ、必要に応じて見直しや修正、年度更新をしていくことで持続可能な学習計画とする。
- ▲思考ツール…児童がより考えやすくするための道具であり、使うことを目的とするものではない。題材や場面に応じて児童が自ら選んで使えるよう、整理、提示の方法を工夫する。
- ▲指導と評価の一体化…評価規準を踏まえた授業改善と、児童の見取りを支援に生かす方法をさらに追究する。
- ▲SDG sの17のゴール…地球規模の課題と児童の身近な地域での活動をつなげるシンボルとして、児童の学習や行動への意欲を高めるための工夫が必要である。
- ▲課題の解決と行動化…課題解決の力を支える豊かな体験や汎用性のある知識や理解の積み上げを他教科等で培い、「価値ある行動化」につながる学習展開を追究する。